富士山の宝永噴火

富士山の宝永噴火は、歴史に残る数々の噴火のうちで、最も新しい富士火山の活動である。この時に生じた噴火口は宝永火口と呼ばれ、富士山の南東斜面に大きなくぼみを作っているのが、新幹線の窓からもよく見える。

1707年12月16日（宝永４年11月23日）の朝10時ごろ、山腹を突き破って激しい噴火が始まった。降り注ぐ火山砂礫は、たちまちのうちに東麓の村村を埋めていった。江戸でも火山灰が降り続き、日中も暗夜のようであったという。

噴火口に最も近い須走村は、壊滅状態だった。大量の焼け石が降り注いだために、家々は炎上し、死傷者も続出した。75戸のうち37戸が焼失し、残りもすべて倒壊するという惨状を呈したのである。

この須走村をはじめ、大御神村、深沢村、用沢村など、周辺50ヵ村あまりが一面の火山礫地と化してしまった。噴火は２週間ほど続いたのだが、その間に須走村に降り積もった噴出物の厚さは、３ｍ以上にも達したという。

噴火が終わって、避難先からそれぞれの村へ帰ってきた農民たちの前に残されていたのは、火山砂礫に覆われた家であり、大地であった。かれらの生活を支えてきた農耕地は、すべて焼け砂の下に埋もれていた。それは絶望的な荒廃だった。機械力のない当時では、厚い砂礫を取り除くこともたやすくはできなかった。収穫を奪われた農民たちは、たちまち飢餓に直面し、深刻な飢饉が発生したのである。

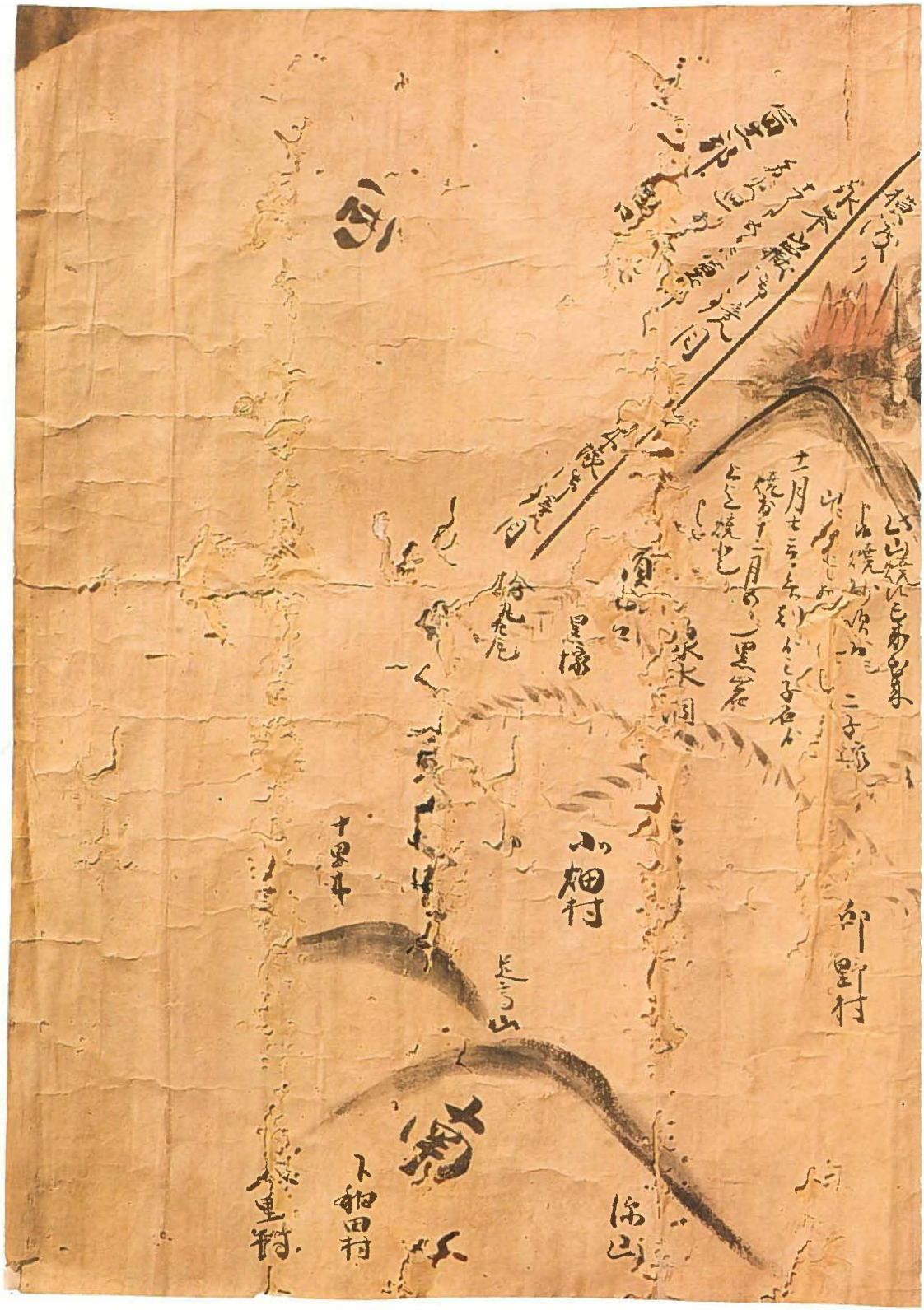
災害はこれにとどまらなかった。山麓一帯に広く降り積もった焼け砂は、雨が降るたびに斜面を押し流し、酒匂川の本流へと集中し、下流へ下流へと運ばれていった。その結果、大量の焼け砂が、酒匂川の足柄平野への出口にある防水堤にたまり始めた。そして、翌年の７月、激しい豪雨がこの地域を襲ったとき、防水堤は一気に決壊したのである。濁流はまたたく間に足柄平野をなめ尽くし小田原藩の穀倉地帯を泥水の中にのみ込んでしまった。それは予想もしない二次災害であった。火山災害の重く、長い後遺症を、富士山の宝永噴火は、はっきりと物語っているのである。

この古絵図は、現在の御殿場市山ノ尻にある滝口家に保存されている富士山宝永噴火の絵図である。滝口家は、先祖代々この地の名主をしていたと伝えられ、噴火当時、このような詳しいスケッチを後世に残したものである。噴火地点や村々の配置、噴煙の向きなどが詳細に描かれている。宝永噴火そのものを描いた古絵図は、この１枚しか知られておらず、その意味でも貴重な映像資料といえよう。

この宝永噴火以来280年近くも、富士山は沈黙を続けている。しかし、歴史時代に記録されているたびたびの活動を顧みれば、この280年は、かりそめの眠りに過ぎないことがわかる。

1982年秋から始められた地震の常時観測によれば、富士山の直下で微小な地震の発生が記録されているという。このような地震活動は、常時観測を始める以前からも続いていたものと考えられている。地下深い所で、マグマがかすかに胎動している証拠だともいえよう。富士山は、いつかは噴火を再開するにちがいない活火山なのである。

（ＮＨＫ解説委員　伊藤明和）



宝永の富士山噴火の古絵図〔「滝口家文書」より（小川孝徳氏提供）〕

須走村
申畑村
東